

**Dear Michi 三世代家族は幸せ**

結婚して40年余。近くに住む長女には中三(女)、小四(男)二人の子供がいます。ある晴れた日曜日、祖父母、男孫と早朝より瀬戸内海のきらきら光る穏やかな波にゆられ友達の船で釣りに出ました。にもかかわらず私は船酔いしてしまい、みんなが釣りに夢中な中「おばあちゃん大丈夫か早めに引き上げようか」と優しい声かけをしてくれ、いつの間にかこんなに気遣いのできる子に育ってくれているのだとほっこりしました。小学校の課外活動でも参加を嫌がるご近所の要支援クラスの和ちゃんが「拓ちゃんと一緒にいいと言う」とお母さんが喜んでおられると聴き、なるほど納得した一日でした。自分の子育て時代は〇〇しなさい、〇〇したらだめなどと素直に従わない子供達に腹を立てたものでしたが、そんな反省を元に家事を一生懸命していたらお料理好きの子供に、読書をしていたら本好きの子供に育っていると感じています。幼い頃は大人は宿題もないし自由でいいなあと思っていたのですが、めまぐるしく渦巻く現代社会で頑張っている娘達家族に少しの余裕が生まれる一助になればと頑張っています。 竹中鈴子

【毎日新聞 2015年5月3日(日)より】

横浜市栄区 滝井弘子さん・72歳

事情があって1歳から育てた孫(男)が、小学2年生になるのを機に両親のところへ帰ることになった。その日、駅で別れる時に孫が財布を取り出し、主人と私に「今までありがとう」と、10円ずつくれた。そして急に私にしがみつき、「おばあちゃんと一緒にいたい」と泣き出した。息子夫婦も泣いた。私はやれやれと思う気持ちが強かったため涙は出なかったが、育て方は間違っていないかと内心しんじった。

※イラストは「感謝の10円」を読んできた友人により描かれたもの

**すがすがしい坊やの「10円」** 神戸市北区 西村保彦さん・88歳

本紙3日の日曜くらぶ「みんな集合」で「感謝の10円」を読んだ。事情があって1歳から祖父母に育てられた男の子が小学2年生になるのを機に両親の元へ戻ることにになり、駅での別れの際、祖父母に感謝して10円ずつプレゼントした後、「おばあちゃんと一緒にいたい」としがみついで泣き出したという話だった。両親も泣いたとあったが、読んだ私も泣いた。坊やの10円玉には、坊やと4人の大人たちの人生模様が詰まっていると思う。そんなことを考えていて、前日の本紙社説を思い出した。小淵優子・前経済産業相の関連政治団体をめぐる政治資金規正法違反事件を取り上げていたのだ。政治資金収支報告書への虚偽記載の額が5年間で3億2000万円に上がり、多額の簿外処理をごまかすために架空の寄付行為を繰り返していたという。坊やの10円がすがすがしい。

【毎日新聞 2015年5月15日(金)より】

**難波三津子様**

御無沙汰しております。ナショナルジオグラフィックと繋ぎを作って戴き、当日は思わぬ教育論で盛り上がり、いろいろと参考になりました。私にとって、森里海連環学の立ち上げと、それをもとにNPO森は海の恋人の畠山篤重理事長との出会いが、今日の“生きている”と実感できる日々の原点のようなものです。立ち上げの過程では、人並みにストレスまみれの中で、その回復に自然、特に森の存在が極めて重要であることを体感したのも、森里海連環学への核心をもった背景かと思えます。40年間研究をつづけてきた稚魚と、孫(孫の世代)の幸せが、森里海連環学を通じて繋がったとの思いです。今回のようないろいろな分野の皆さんとの出会いを通じて、実現化するものだとの角信にも繋がっています。これらの最も重要な背景に畠山さんとの出会いと、それを通じた世界の広がりがあることは言うまでもありません。三世代教育は、とても大事だと感じています。兵庫県赤穂市でも牡蠣が重要な地域産業になっており、市内を流れる千種川の恵みだとの考えが広がりつつあり、改めて森と海の繋がりの実際を思い知らされることになりました。講演では皆さんからの質問も、かなり専門的で驚かされました。

田中克(京都大学名誉教授・舞根森里海研究所所長)



15歳から農業ひとすじ  
 ~つなげる東北、日本、世界を~

**Dear Michi**

10年経ち、ようやく私が言っていたことが少しずつ理解してもらえるようになってきたか、というところです。今回の福島行きは、保坂展人区長の仲介もいただき、世田谷に定期的に福島から子供たちをキャンプに送っているシャロームという支援組織の方ともお会いします。基本は、「福島の子供達の声をオランダの子供たちに届ける会」という、オランダにいる日本人のお母さんたちと作った会の活動で、福島の子供達を「被災者」として終わらせることなく、世界のいろいろな地域にメッセンジャーで行ってもらいたい、そのためにオランダを皮切りに、とあって発足したものです。日本の事情の方が複雑で、線量が低くなったと言って福島に戻れるという政策を進めたり、自主避難者への支援打ち切りをしたり、というような事情の中、子供達自身が、被災したことへの声を発することがやりにくい状況になっている都いうねじれ状況の中で、果たして、子供達を呼べるのか、どこかにこれを支援してくれる団体がいるのか、ということを少し調べてみたいということで今回福島に参ります。中学生や高校生をオランダにも招きたいのです。資金繰りなどの問題もありますが、どのような形が可能なのか、難波さんも御存じのふたば未来学園高等学校の南郷一兵副校長様にもご相談にのっていただけると嬉しいです。被災地の学校起こしと重ねて、被災地の中学や高校の生徒たちとオランダの子供達をつなぎたい、という希望は前からありました。また学校間交流のようなこともやれば良いのに、とも思ってきました。どのようなことが可能かはわかりませんが、何か良いプロジェクトがあれば、コラボできれば良いですね。 リヒテルズ直子

伝統文化の土台が消えてしまう 倭文年江

2015年10/7~10/15、東北の3度目の旅の中でいろいろ見聞したけれど、連綿と伝えられてきた土地に根づく文化の土台そのものが、このままでは消えてしまうという恐怖に近い危機感を持ったこと、しかもそれが子ども達へのシワ寄せという形で出てきていることが本当に情けない。まず学校そのものの現状は、あの津波で使用不能になったままの校舎は数多くあり、更に自分達の家がこわれてしまったり、親の勤務先の工場や会社がこわれたりしたことで、別の土地へ転居する等、震災後のさまざまな状況の変化から、子どもの数が激減してしまったため、学校として存続できなくなったので、どこかの学校に間借りするなどの仮の対応から、3つぐらいの学校を合併して、新しい学校を作るという方向へ、切りかえられてきている。地域の土台となっていた学校が1つ、また1つと消えていっているのだ。さらに、校庭には仮設住宅が建てられていて「津波で家を流されて困っている人の住宅だから」と子ども達の方も不満を言わず、被災者も「早く子ども達に校庭を返したい」と気をつかうが、出たあとの行き場が決まらない状況で出られないでいる。陸前高田市の語り部をしている實吉義正さんが嘆いていたが「震災の年に入学した子ども達は、このまま校庭を使えず卒業することになってしまう」、すでに4年半たってしまうのだから今の膠着状態を打開できないままだと、本当にそういう事態になってしまう。故郷の景色そのものが全て消えてしまった上に似ても似つかぬ形に土盛りされていく、荒涼とした姿を毎日見続けさせられて、友達と遊び呆ける校庭まで取りあげられている子ども達の気持ちを思うと、やりきれない。更に、学校の統合にかかわって實吉さんが案じていたのは、今まで地域の学校は、それぞれの土地の伝統芸能の担い手として、神楽や踊りを地域の古老が教えに通い、次代の継承者を育てていた歴史がある。それを、3つも統合して新しい学校を作ったら、3つ分の固有の文化をどう伝承していくのかという問題がおき、ひょっとしたら伝えあいが消えてしまうかもということ。獅子のお面とか太鼓とかも津波に流された上に、パントンタッチの相手がなくなるとは伝えようがなくなるのだから。ここで消してしまったら、復活することは難しく、昔ここにこんな土地の舞があったという思い出すらも消えていくことになってしまう。子ども達の未来の文化を無策な政治行政に奪われてしまつてよいのだろうか。

Visit to Tohoku in 2015  
 千尋ゴダード (旧:倭文千尋)

While travelling in Tohoku, we visited Miyako, Taro, Kesennuma, Kesennuma Oshima Island, and Rikuzentakata, all of which were badly damaged by Tohoku earthquake in 2011. Having the ground sunk followed by the Great Eastern Earthquake, a huge amount of building work was necessary in those areas – building up the embankment, constructing new roads, establishing new residential areas on higher ground and planning to build higher seawalls. We felt that Taro, north of Miyako, and Rikuzentakata were the badly affected places; as of 2015, we could see a large area of empty land at these two places. Taro was known as a disaster prevention town by an X-shaped seawall. On 9 October, we met the bosai tour guide, Ms Hirai, and she took us to the No.1 seawall. We found it interesting to hear how the No.1 seawall was built: after experiencing two big tsunamis, from 1934, residents built up a long distance wall with stones and concrete was filled up on top of the stone wall. Having walked on the No.1 seawall, we felt this surviving wall was solid one, compared to the No.2 seawall, which was made of sand and gravel, and was destroyed. The seawall can protect people from the small and medium level of waves but not huge tsunamis; we should never underestimate natural disasters. An iconic pine tree has made Rikuzentakata famous. Our guide, Mr Miyoshi, agreed that that pine tree withstood the tsunami miraculously but lamented that it represents the loss of Takada Matsubara – the residents' favourite resort. He took us to the former Michi no Eki building, which used to be standing on the site of Takada Matsubara. We found the sign that the tsunami reached 14.5m at that building on 11th March 2011. This tsunami memorial building showed broken tree trunks and concrete pieces inside and the detachment of the porch outside. At Kesennuma, we found the exhibitions of the Great Eastern Earthquake at Rias Ark Museum very interesting. We looked at photos of various places in Kesennuma and Minami-sanrikucho, and contents of debris – broken wooden and concrete pieces, swollen books, and a squashed car. People lost a number of irreplaceable items such as treasures that had been kept by the families since the ancient time. It must have been very sad for residents to hear the noise of the tractors demolishing their old houses. Including Ms Hirai and Mr Miyoshi, we met various people this time. They all kindly talked about their experiences and thoughts about the ongoing building works and problems – delayed building work, decreased population, and fewer job opportunities – that have arisen in the devastated areas. We are thinking of them and wish them the very best in the future.

おかげさまで  
 ロンドン大学卒業

Hiroataka Tachiki  
 立木弘賢